『山谷題跋』巻四に於ける二王の存在に関する考察（下）

塚本　宏

はじめに

『山谷題跋』は、北宋の黄庭堅（山谷）（一〇四五～一一〇五）が書いた題跋を収録したものである。

本稿は、明の毛晋の『津逮秘書』本（略して『毛本』）を底本とした。『毛本』の全体は、九巻・四一二篇からなり、その内訳は、

巻一……四九篇
巻二……四四篇　―詩文
巻三……三三篇　―画
巻四……三四篇
巻五……四二篇　―書
巻六……三四篇
巻七……四七篇
巻八……六八篇
巻九……六一篇　―詩文及び書画

であり、その内の巻四（三十四篇）を扱い、しかもその中の「二王」、即ち王羲之（三〇七項～三六五項）と王獻之（三四四～三八六）の父子に関する十九篇について考察の対象とした。各篇は次表の通りであるが、前年に上巻として十九篇の内の十篇を扱い、本稿は下巻としてあとの九篇をその対象とし、さらに巻五からも関係のある数篇を加えた。巻四の各篇は次の通りである。

1　題太宗皇帝御書（太宗皇帝の御書に題す）
(2)　跋蘭亭（蘭亭に跋す）
(3)　又（又）
(4)　書右軍帖後（右軍の帖の後に書す）
(5)　書右軍文賦後（右軍の文賦の後に書す）
(6)　題瘞鶴銘後（瘞鶴銘の後に題す）
(7)　題樂毅論後（樂毅論の後に題す）
(8)　題東方朔畫贊後（東方朔畫贊の後に題す）
(9)　題洛神賦後（洛神賦の後に題す）
(10)　跋法帖（法帖に跋す）
(11)　題絳本法帖（絳本法帖に題す）
(12)　書遺教經後（遺教經の後に書す）
13　跋佛頂呪（佛頂呪に跋す）
(14)　跋續法帖（續法帖に跋す）
15　題榮咨道家廟堂碑（榮咨道家の廟堂碑に題す）
16　題張福夷家廟堂碑（張福夷家の廟堂碑に題す）
17　題蔡致君家廟堂碑（蔡致君家の廟堂碑に題す）
18　題虞永興道場碑（虞永興の道場碑に題す）

19 題徐浩碑（徐浩の碑に題す）
20 題楊凝式詩碑（楊凝式の詩碑に題す）
(21) 題楊凝式書（楊凝式の書に題す）
22 跋張長史千字文（張長史の千字文に跋す）
23 書張長史乾元帖後（張長史の乾元帖の後に書す）
24 跋張長史草書（張長史の草書に跋す）
(25) 題顔魯公帖（顔魯公帖に題す）
(26) 題顔魯公麻姑仙壇記（顔魯公の麻姑仙壇記に題す）
(27) 跋顔魯公東西二林題名（顔魯公の東西二林の題名に跋す）
28 書徐浩題經後（徐浩の題經の後に書す）
(29) 跋翟公巽所藏石刻（翟公巽所藏の石刻に跋す）
(30) 跋王立之諸家帖（王立之の諸家帖に跋す）
31 跋李後主書（李後主の書に跋す）
32 跋李伯時所藏篆戟文（李伯時所藏の篆戟文に跋す）
(33) 跋洪駒父諸家書（洪駒父の諸家の書に跋す）
34 跋武德帖（武德帖に跋す）

（）の篇は二王と関係のある篇）

一

「書遺教經後」は、『東坡題跋』巻四の四番目に「題遺教經」[1]と題してある。「遺教經」については、東坡と山谷とは多少見方が違っ

ている。東坡は欧陽脩に会ったとき「遺教經」は羲之の筆蹟ではないと言われた。その言の通りに見るとまちがっていないと東坡は認めているが、しかし、羲之が生きていた時からすでに小児が本物と間違うほどそっくりで、羲之自身も弁別でなかったのである。まして数百年の後に伝えられたもので、その真偽を決めようとするのは困難であると思った通りを述べ、最後に「遺教經」の筆画は精緻でしかもおだやかで、「自可爲師法」と、即ち、手本にすることができるとまで付言している。これは羲之の本物ではないとしても、それは人がそのように伝統的な見方から説くのであって、誰が書いたか不明ではあるが、とにかく「筆畫精穩」でよいと言う見解である。

山谷は、「遺教經」は羲之の書であるということには直接触れずに、「或曰、右軍羲之書」と具体的に誰なのかはわからないが、或る人が言うにはという言い方である。そして、山谷自身が「遺教經」を評して「楷書の中では小字は楽毅論に及ばないまでも、清勁方重で梁の蕭子雲よりも数等上である」と述べている。また、「瘞鶴銘」の大字は、羲之の書であることは確信をもって説き、その秀れた筆法から「遺教經」を見ると羲之の筆画とは別のものであると説明している。従って東坡も山谷も羲之の書でないことについては異論はないようであるが、山谷のほうが少し強い否定をしている。しかし、書そのものについては両者とも感心を寄せていて、東坡は「精穩」、山谷は「清勁方重」と好評である。

しかし、ここで一つ問題となるのは、山谷が自信をもって言うように、「瘞鶴銘」は本当に羲之の書なのであろうかということである。黄伯思は『東観余論』では梁の陶弘景説を主張しているが、筆者は不詳ということが一般的ではある。山谷は何かきっかけがあって「若瘞鶴碑、断爲右軍書」と力説しているのであろうか。それが一体何なのか、山谷をして何がそのように言わしめたかが今後のこの題跋に関しての課題である。

また、その後に付言して、欧陽詢、薛稷、顔真卿、柳公権の書は最も端勁であるが、これらはわずかに「瘞鶴銘」を髣髴とさせる程度のものであるとし、山谷は「瘞鶴銘」を一つの基準にして他の作品を見ている。即ち、欧・薛・顔・柳の四名の個性的な書家の作品より以上に「瘞鶴銘」を位置付けている。なお、「瘞鶴銘」については楊守敬の『激素飛青閣平碑記』に

銘舊在焦山下水中。水落始可拓。康熙中陳滄洲鵬年拽置山上建亭覆焉。石凡五断。是書之妙、宋元以來無異論。惟不得書銘之人。山谷直以爲逸少書。固屬武断。至有疑爲唐顧况・皮日休書者、亦是臆説。黄長睿以爲陶宏景書。當梁天監十三年。今以書法體格論之當是也。山谷一生得力於此。然有其格無其韻。蓋山谷腕弱、用力書之不能無血氣之勇也。

とある。即ち、「瘞鶴銘」はその書の妙は宋元以来、何人も異論のないところであるが、書者は誰であるかについては諸説紛々としている。山谷が羲之の書であると主張するのは独断にすぎず、唐の顧況や皮日休の書とする説は臆測であるとはっきり述べている。そして陶弘景説については「やや当れるやに思われる」と。また、山谷の書は「瘞鶴銘」より出たものであるが、その形は似ているがこの神韻を得ていないと手厳しい評である。

「跋續法帖」の『續法帖』は『太清楼帖』のことであろうとされている。『太清楼帖』は十巻、哲宗の元祐五年（一〇九〇年）『淳化閣帖』に入らなかった遺墨を中心に、徽宗の建中靖國元年（一一〇一年）までかかって完成したものである。従ってその『太清楼帖』に跋すということであるが、はじめの山谷の「在館中時」とは都に居た時、即ち元豊八年（一〇八五年）から元祐六年（一〇九一年）までの七年間で、秘書省校書郎の地位にあった時である。その時、宮中において見たという李懐琳の臨書した羲之の「絶交書」は、非常に秀れたところがあったと昔を思って述べている。しかし、今見ているこの『續法帖』中の「絶交書」は、そのまずさは「十未得其二三」と述べ、またさらにこのまずさ加減から言えば、十巻全体もほぼこの程度のまずさであろうというのであるが、山谷の鑑賞眼の鋭さがここにもあらわれている。きっと以前宮中で見たという李懐琳の臨書の印象が、飛び抜けてよかったからであろうか。「大有奇特處」とまで誉めているのであるから、これに勝るものはないのであろうか。

そして、さらにまずいことに智永の十八行の書を羲之の書としたり、蕭子雲が索靖の書を臨書したものを索靖の書としたりしているという基本的な間違いは問題にならないことである。これらの判断は模写者の鄭彰にすべてまかせて責任を負わせるのは無理なのであり、実力もなく鑑賞眼もない者がその重責に当るということ自体、問題であると山谷は述べている。たしかに智永の書は羲之に似ているが、表面にあらわれた形式的な所のみを見ているとこのような間違いを起してしまうということを言いたいのであろう。

また、最後に付け加えて、劉無言の題箋を大いに誉めている。もし劉が長生きすれば江東地方よりかの羊欣や薄紹之のような大書家となってあらわれることであろうとまで言っている。題箋に秀れているということは、書の本当の実力がそこに表われているという山谷の書の見方、さらには人間の見方なのであろう。劉は名は燾、字は無言、長興の人、元祐三年、蘇軾が知貢挙の時、文章が典麗であることを称賛し、甲科に合格した。書を能くして召されて閣帖を修し、秘閣修撰にいたったという人物である。

なお、「絶交書」についてであるが、「山巨源（山濤の字）に与えて交わりを絶つ書」のことで、竹林の七賢の一人である晋の嵇康は

友人の山濤が尚書史部郎(選曹郎)の職を辞するとき、自分のかわりに嵇康を推薦したが、一文を書いてこれを拒絶した。この文が「絶交書」である。また、「絶交書」について『世説新語』(以下『世説』と称す)棲逸第十八3に

山公將去選曹、欲擧嵇康。康與書告絶。

とある。その注にある『嵇康別伝』には

(前略)豈不識山之不以一官遇己情邪。亦欲標不屈之節、以杜擧者之口耳。乃答濤書、自説不堪流俗、而非簿湯武。大將軍聞而惡之。

とある。即ち、山濤が一官職を以て自分の気持ちをむかえようとしたのではないことを、どうして知らないことがあろうか。ただ不屈の節操を表して、自分を推挙する者の口を閉ざそうとしただけであろう。そこで嵇康が山濤への手紙に、世俗には堪えられないこと。また、殷の湯王、周の武王のやり方を非難し軽蔑したことを説いた。これを聞いた当時の大将軍の司馬昭は、嵇康をにくんだという内容である。要するにこの「絶交書」は、親友同志の嵇康と山濤との間で仕組まれたあくまでも表向きの書状である。山濤自身の後任として嵇康を推薦したことに対して絶交という形で応えた嵇康は、友人山濤を何はあっても巻き添えにせず、また迷惑をかけないという配慮から、親友関係を絶ち切ったという形をもって証拠としたのである。その後間もなく司馬懿の手にかかって予想通り嵇康は殺されてしまうが、その理由は前述の通り帝位にある司馬氏の思想に楯突いたからである。即ち、『文選』巻四十三「與山巨源絶交書」嵇叔夜に

毎非湯武而薄周孔。在人閒不止此事。會顯世教所不容。此甚不可一也。

とある。この嵇康の刑死について、かって魯迅は講演[2]『魏晋の風度及び文章と薬及び酒の関係』の中で採り上げている。即ち

湯・武・周・孔を非難することは、今の時代ではかまわないが、当時は関係するところが大きかった。湯・武は武力をもって天下を定めた者であり、周公は成王を補佐した者であり、孔子は堯・舜は天下を禅譲した者であります。嵇康はどれもよくないといった。それでは司馬懿が帝位を簒奪するとき、いかなる方法によればいいのであろうか。すなわち、方法がないのだ。この点において嵇康は司馬氏の工作に直接的影響をもったので、殺されざるを得なかったのであります。

とある。嵇康をこのまま生かしておいたら自分たちが危いという危機感から殺さざるを得なかったのであろう。しかし、当時の流行の

先端とも言われる程の竹林の七賢の一人であった嵇康は、清談の中心人物であり、むしろ議論を楽しんでいたということが本音だったのではないだろうか。なにもむきになる程のこともなく、ただ日常の話題として司馬懿はとらえられなかったのが残念なことである。

二

「題楊凝式書」は、はじめに「俗書喜作蘭亭面」と「蘭亭」が扱われているので本稿の対象となった。山谷はどうして楊凝式の書に「俗書は蘭亭序の表面だけをまねようとする」などといきなり書いたのであろうか。楊氏の書が蘭亭に似ていて、うわべをまねた俗書に山谷の眼にはうつったのであろうか。しかも「欲換凡骨無金丹」とさらに付け加えて、「たとえ凡骨を蘭亭に置き換えようとしてもそのような妙薬などはない」とはっきり言っている。そしてさらに強烈なのは「落地して命あらば筆を下せば却って烏絲欄に到る」とまで言っている。即ち、今のままではもう見込みはなく、今度生れ変わって新しく生命を受けたらきっと烏絲欄をはみ出すようなのびのびとした書が書けるだろうというのである。これは山谷自身が直接的に楊氏の書について評しているのであろうか、それとも楊氏の書ではなく一般的なこととして述べているのであろうか、疑問の残る点ではあるが山谷は蘭亭序に対して批判的に見ているということからすれば、蘭亭序は表面ばかり臨書していては上達もしなければ何の役にも立たない。書について蘭亭序一辺倒に考えるのでは、もう変更もできないし、特に妙薬もないので生まれ変わった時にしか本心を変えることはできないという山谷の考え方であろう。要するに羲之が書いた蘭亭序そのものは、表面的な用筆法中心の技巧を主としたものではなく、精神性からくる自然美[3]の一つとしてとらえるべきで、書道観を変えない限りどうしようもないということを言いたいのであろう。従って前述のように楊氏の書が俗書で、蘭亭序に似ていてという論ではなく、楊氏の書はむしろ超俗の雰囲気をもって従来から書かれていたので問題はないのである。

「題顔魯公帖」は、いよいよ本論とも言うべき顔真卿の登場である。山谷はやはり顔真卿から多くのものを学んだのであろう。本題跋では書道史の全体の流れの中でとらえたような言い方をしている。先ず「顔魯公帖」を、見て「奇偉秀跋」と言っている。そして、魏晋隋唐以来の書の風流気骨を包括していて、欧陽詢・虞世南・褚遂良・薛稷・徐浩・沈伝師などの書家は皆一様に規則にとらわれている。しかし、真卿は規則を抜け出していて、自由に書いてしかも最終的には規則に合致しているのとは同じではない。即ち、欧虞褚

などとは真卿は同じではないということを整理して述べるということは、山谷自身がこのようなことを真卿から学びとっていると言えるのではないだろうか。そして、さらに二王との関係に於いて、山谷は日頃書道史の流れの中で次のようなことを感じているのである。

蓋自二王後、能臻書法之極者、惟張長史與魯公二人。

即ち、羲之父子より以来「書法の極地」にいたるものは、ただ張旭と真卿の二人だけであるということである。この「書法の極地」とは大きな言い方であり、具体的には一体何について山谷は言いたいのかは不明であるが、初唐を通り越して、中唐の張・顔の二人まで飛ぶということは一体何がねらいなのであろうか。これは初唐の規範的な楷書を中心とした書法を重い切り批判するという立場をとったと見るべきであろうか。法則性を重んじた初唐の書法というようにひとくくりにして、あまり触れたがらない山谷の考え方は、またはっきりとしている。即ち、法則性が強い書法ということは非人間的な面が重んじられた書法とまで反射的に思うのであろうか。そして、さらに付言して

其後楊少師、頗得髣髴、但少規矩、復不善楷書。然亦自冠絶天下後世矣。

と、前述した楊凝式を例に挙げている。即ち、張・顔の後、楊は張・顔の二人に考え方がよく似た所はあるが、ただ気になるのは法則性が少ない点と、楷書をよくしない点である。この二点については残念であるが、楊は後世に冠絶するものであると山谷は一目置いている。張旭は草書の名人であり、二項目前の題跋「跋張長史千字文」で「張旭の郎官石記の楷書は天下に妙絶するものであり、楷書がたくみだから草書もたくみだ」と誉めているように、山谷は楷書に妙であることが書家の書家たる一つの条件のようである。従って楊に対しても楷書についての要求が厳しく、あまり善くしないということについては残念であると述べている。しかし、山谷は大きな目で見ることにより楊を大いに買っているのである。

「題顔魯公麻姑壇記」の中では、山谷がかって顔魯公の書について評したことを先ず述べて

體制百變、無不可人、眞行草書隷、皆得右軍父子筆勢。

とある。その書風は様々に変化しているが、すべてその人格を表わさないものはない。一碑一面貌の如くすべて異なった顔をそれぞれの書に表出している。書体で言えば楷書・行書・草書・隷書とあり、それらはすべて羲之と獻之の父子の筆勢を得ていると以前に評し

ている。これは真卿の書に対して誰もが感じることであるが、山谷もはっきりとその「體制百變」を認め、人間性の上に立脚していることを説いているが、さらに本題跋の特徴は具体的に羲之父子について触れていることである。やはり書道は幾千年もの長い伝統の上に存在しているのであり、真卿の書の中にそれを見抜いて、そしてその考えに確信を持って述べている所が山谷の確立された見識である。山谷が今あるのは真卿が居たからであり、真卿があるのは羲之父子即ち二王が存在したからであり、書道の伝統芸術たるゆえんである。一般的に書道家に限らず芸術家は、先人の歩んだ道を追体験して自分自身で歩かなくてはならない宿命がある。寺田寅彦は、芸術家の本来の仕事は先人の遺したものを継承してその上に研究をただ続けていくのではない。それはどちらかというと科学者の方法であると随筆「科学者と芸術家」の中で述べている。科学者は日進月歩の研究を積み重ね、先人の研究を受け継いでそして前進させて新しいものを発明し作り出す宿命があるが、芸術家は長い歴史上の秀れた先人のものを自分の力で追体験し、その後に新しい自分のオリジナルを生み出していくという点科学者とは大きな違いがあるのである。

従って、山谷は以上のような追体験を真卿が実践してきたということを見出し説いているのである。二王の書に視点を定めそこから血となり肉となるものを得て自分の書を確立した真卿の行き方を山谷は認識し、今度は真卿の書法を得るために二王の書法を習い、その上に真卿を学びその後に自分の書を作り上げるという方法を山谷は感知したのである。

また、本題跋の後半部分は欧陽脩の『集古録』に記されているが、別の所、即ち「小字麻姑壇記」に書き記して真卿の書を欧陽脩は喜んでいるようである。そして最後に山谷は付言して

自非精鑒、豈易辯眞贋哉。

とある。即ち自分で書の鑑別に精しいものでなければ真贋を弁ずることは難しいことであると述べている。これは具体的には欧陽脩が適した人物であると山谷は見ているのである。

なお、「麻姑壇記」については、葛洪の神仙伝を引いて仙女麻姑について、また仙壇についても記したもので「麻姑仙壇記」とも称される。大字本、中字本、小字本の三種が伝えられているが、中字本は偽刻であると言われるが、大字本と小字本の原石はいつの間にかなくなってしまったということである。また、小字本については、北宋の欧陽脩は『集古録跋尾』の中で「或は魯公の書に非ざるを疑う。魯公は喜びて大字を書き、小字のものはない。ただ干禄字書がもっとも小字であるが、その体法はこの記と同じではない。蓋し干

禄字書の注は持重舒和で局蹙していないが、この麻姑仙壇記は遒峻緊結ではなはだ精悍である。これを疑うものがあるのはこの点である。自分も初めは大いに疑っていたが、長い間把翫しているうちに筆画の巨細にみな法があり、看れば看るほど佳くなって、然る後に魯公でなければ書けないということを知った。」と賛成論を述べている。これに対して、北宋末期の趙明誠は『金石録』で「字は絶小、世また以って魯公の書となすも、その筆法を験するに殊に似ず。陳無己がいうには、自分は嘗って黄山谷に会ったが、山谷は慶暦中に一学仏者が書いたものであるといっていたと。山谷はその時、その人の姓名をいうことができたが、陳無己は記憶していなかった。小字本を今、後に録し、覧るものをしてその真偽を詳らかにせしむと云う。」と、真卿の書とすることに疑問を投げかけている。そして陳無己が山谷から聞いたという一学仏者の書だという見解を明らかにしている。

山谷は本題跋後半で「小字本」について欧陽脩の『集古録』の内容に触れて、「自非精鑒、豈易辯眞贋哉」と述べてむしろ欧を誉めて一目置いているのであるが、趙明誠の『金石録』では一学仏者の書であるという山谷自らの見識を紹介されている。即ち、欧の真卿論を自分の題跋で取り上げ、趙の『金石録』では無名の一学仏者論を述べている。時間の差はあるにせよ矛盾した山谷の「小字本」に対する見方である。

「跋顔魯公東西二林題名」の「東西二林題名」は「東林寺題名」と「西林寺題名」の両寺に関してのもので、東林寺碑は永泰二年六月壬戌に碑側に刻し、西林寺碑は同年六月癸亥に永公碑の碑陰に題したものである。前述の題跋と同じように真卿の書について評すには

　獨得右軍父子超軼絶塵處。

と述べている。即ち、真卿はひとり羲之父子のとびぬけて秀れている所（超軼絶塵）を得ていると、かって言ったことがあるが、このことには書家たちは必ずしも私の意見には同意しなかった。ただ翰林学士の蘇東坡先生だけが許可してくださったと付け加えている。また、後半部分では郭忠恕の『説文字源』の後の序を見ていたら、それには「父が忠恕に張旭、顔真卿の筆法を授けた」と書かれていたのを読んで山谷は

　乃知人中常自有精鑒耳。

と述べている。即ち、多くの人の中にはいつでも物ごとのよくわかる人がいるものだということを知ったというのである。張旭と真卿

の書法について忠恕の父親が明確に理解して子に授けたのである。山谷にしてみれば真卿のことについて序の中に述べられていたことを読んで、大変に嬉しかったのであろう。しかも父親が子に授けた筆法の中に真卿が入っていたこと自体が嬉しかったのであろう。世間もまんざら捨てたものではないと感じたのであろう。

三

「跋翟公巽所藏石刻」は、十九項目から成っているが、二王に関係のあるものはその内の五項目である。先ず「石鼓文」の筆法のことであるが、

「石鼓文」の筆法はとりわけ貴重な玉器のようであり、後世の人が贋作を作ることはできない。この書をよく見ると楷、行、草の法則を会得できるであろう。このように言うのは私の臆説ではなく、羲之もそのように行っている。

というのである。「石鼓文」を誉めるのにもこのような言い方をすると世間の人々もよく理解してくれるのであろうか。羲之はやはりたいしたものである。

次は「黄庭經」についてである。

「黄庭經」は羲之父子の書であるが両方とも見ることはできない。小字の不完全本は智永禅師の書であるといわれる。また、すでにすりへって欠けていて、字がやや大きくて真贋を弁別しがたいのは呉通微の書であるといわれる。字形はやや縦長でやせて強い線で、筆づかいが円やかであるところは徐浩の書より勝れている。

と山谷は説明している。　次に「樂毅論」であるが、

「樂毅論」の旧石刻本で石が割れて半分ほどなくなっているものは、文字がやせていて俗気がない。後世の人がこの断石文を復刻したが、摹刻しているうちに本物からはなれてしまった。すべて完全なものは宋初の翰林侍書、王著の写本である。用筆は円熟しており入手しにくい。この王著本は富貴な家の子弟のようで、福相がないわけではない。ただ欠点は韻にある。

と説いているが、これも山谷の目の付け所のすばらしい点である。二王の時代の書（「樂毅論」はその代表作である）で「韻」が感じられない書は最低であり「韻」は書作に於いても、鑑賞に於いても一つのポイントであり、また二王時代、即ち晋代の時代性を象徴する概念でもある。この書の時代性については明代の董其昌は『容台集』の中で

晋人書取韻。唐人書取法。宋人書取意。

と述べている。「韻」とは風韻であり、ひびきあいの意である。「法」は技法、「意」は精神、気持ちの意である。山谷がこの「樂毅論」（王著本）に「韻」が欠けているという指摘は、さすがによい所に注目したものである。形式にこだわり、形のみを摹刻して遺そうとする書にはとかく失われがちなのがこの「韻」である。

次の、「遺教經」については、

後秦の弘始四年（四〇二年）に記されたもので、弘始四年は羲之の没後数年に当る。弘始年間には訳本はあっても江南地方には届かず、南北朝時代の陳氏の時代（五五七年）に、ある翻訳者が「遺教經論」を出し世に行なわれた。今、長安の雷氏家の「遺教經」をみると、石の上の部分の行書は貞観年間に「遺教經」を世に行わしむるための聖勅であり、能書の写経生の書いたテキストを択んでこれを頒布させた。勅と経の書は同一人であるが違いは楷行にある。私は「遺教經」は羲之の書ではないと疑っていたが、近ごろ考究[4]してみると本当に羲之の書ではないと決めたのである。

と山谷の研究の結果報告を聞かされているようである。

次は真卿の三帖についてであるが、

真卿の「寒食帖」「乞鹿脯帖」「乞米帖」の三帖は、みな獻之の書と比肩すべきものである

と山谷が獻之を持ち挙げている。どうして父の羲之でなくて、息子の獻之なのであろうか。線の鋭さ、字形の大きな変化という点に見方のポイントを絞ったので、獻之と「抗行」などと山谷は敢えて述べているのであろう。

なお、「抗行」については既に散見できるが、何と言っても羲之の『自論書[5]』の冒頭に

吾書比之鍾張、當抗行。或謂過之。張草猶當雁行。

とある。また宋の虞龢の『論書表[6]』には

又云、吾書比之鍾張、鍾當抗行。張草猶當雁行。

とある。また『晋書』王羲之伝には

毎自稱、我書比鍾繇、當抗行。比張芝草、猶當雁行也。

とある。さらに唐の孫過庭の『書譜』には

又云、吾書比之鍾張、鍾當抗行。或謂過之。張草猶當雁行。

とあり、ほとんど同じようであるが、若干違っている。

「跋王立之諸家帖」の王立之は王直方のことで、大観三年（一一〇九年）四十一才で卒す。本題跋は三項目中一項目のみに右軍の名がある。即ち

顔魯公の書を見ると欧、虞、褚、薛の書はまだ右軍の室に入っていないということがわかる。楊少師の書を見てはじめて徐浩、沈伝師の書に塵埃の気があるのがわかるのである。しかし、この論は明らかな定論ではない。なぜなら、それは誰でも自分の能力の限界でもって人を誉めたりけなしたりすることが多いからである。

と述べている。正に山谷自身、自分をよく知ってものを言っているということであろう。しかし、山谷の見方は形にあらわれた書、形を主体に考える書よりも、その中に包まれている眼には見えない心の世界、気持の世界を主体とした書に心引かれ、そのような書に軍配を上げているのである。欧、虞、褚などの初唐の書は法則的には見事なものであっても、目に見えない気の書、心の書という点に顔真卿の書は定められていて、その点に於いて羲之との一線をも見出し得て山谷は納得がいくのであろう。

さて、最後となる「跋洪駒父諸家書」であるが、洪駒父は洪芻、字は駒父、南昌の人、紹聖元年の進士、靖康中に諫議大夫となった。詩に工みで、『香譜』『老圃集』がある。山谷の妻の父にあたる。本題跋は三項目ある中で一項目のみ羲之と関係がある。やはり真卿について触れている。即ち

真卿の書は自ら一家を成しているが、めぐりめぐってその源をたずねると、みな右軍父子の筆法に合致している。世間の書家の多くは右軍父子の筆法までいたらぬために、徐浩や沈伝師を尊尚するのである。九方皐が千里の馬を沙丘に於いて入手した時、多くの馬喰たちは彼をあざ笑った。今の書を論ずる者は多くの馬喰と同じように「牡の驪」と称するような、外見だけで判断する者が多い。

と山谷は力説している。徐・沈で納得するのではなく、その根源である羲之父子の書について触れてみるということが重要だということ。また、外見にこだわるのではなく、その本質を見るような眼を作るべきだということを最も言いたいのであろう。

顔真卿を通して羲之の世界を見ようとする山谷の見方も一つである。真卿の先に羲之父子がいると言ったほうが、具体的にわかりやすい説明方法だと山谷は判断したのであろう。伝統芸術であればこそ、それを守るためにも縦の流れを見る習慣を、山谷のように身につけることも不可欠である。今の書を論ずる者はとかく馬喰が馬の外見だけで決めてしまうように、深く見て考えて本質に迫まろうとしない。本質を見抜くためには、千里の馬を沙丘に於いて獲得するように、努力をも惜まずに追求する精神こそ肝要である。外見にこだわることなく、また外見を問題にすることなくその天機を見出すという九方皐[7]の故事のように書の研究に力を入れるべきだと日頃から山谷は考えているのであろう。

黄山谷、名は庭堅、北宋の慶暦五年（一〇四五年）六月十二日生。洪州分寧（江西省）の人。字は魯直。号は山谷道人、晩年の号は涪翁、摩囲老人、黔安居士、八桂老人。先祖には知事、朝散大夫などの経験者あり。父は名を庶、康州（広東省）の知事。山谷は五男四女の内の次男。幼少の頃に警悟、読書は数過にして誦を成す。詩文の才能に秀れ、蘇軾は嘗ってその詩文を見て、「以爲超軼絶塵。獨立萬物之表、世久無此作。」と絶賛した。蘇軾を慕って詩を学び、秦観、張耒、晁補之と共に蘇門の四学士と為した。詩は唐の杜甫を範として、「換骨奪胎」の妙を極めて一家をなし、後に江西詩派の祖と仰がれた。

書については、元の陶宗儀の『書史会要』に、

黄庭堅、字は魯直、号は山谷道人。洪州分寧の人。官は吏部員外郎に至る。正楷行草に工みにして、楷法は妍媚、自ら一家を成す。草書は尤も奇偉なり。嘗て自ら云う、余は極めて顔魯公の書を喜む。時々意相して之を為る。筆下風気有るに似たり。然れども子瞻に逮ばざること遠く甚だし。子瞻、余が為めに魯公十数紙を臨写す。乃ち人家の子弟の如きは、老少類せずと雖も、然も皆、祖父の風骨あり。また云う。嘗て漢時の石刻篆韻を観るに、頗る楷法を得たりと。また云う、学書三十年、初め周越を以て師と為す。故に二十年、抖擻して俗気脱せず。晩に蘇才翁子美の書を得て、之を観る。乃ち古人の筆意を得たり。其の後、また、張長史、僧懐素、高閑の墨蹟を得て、乃ち筆法の妙を窺う。

とある。

山谷の年譜を見ていくと、皇裕三年（一〇五一年）、七歳にして「牧童詩」、八歳の時に「送人赴挙詩」の詩がある。嘉裕三年（一〇五八年）に父黄庶が康州にて没す。嘉裕六年（一〇六一年）十七歳、淮南で李常に学び、孫覚を識り、此の頃はじめて書を学ぶ。手本として周越の書を学ぶ。治平四年（一〇六七年）二十三歳、京師に留まり進士に及第し、汝州葉県の尉となる。熙寧元年（一〇六八年）二十四歳、孫覚の娘と結婚。熙寧二年（一〇六九年）二十五歳、王安石の新法に反対。熙寧五年（一〇七二年）二十八歳、学官の試験に合格し、北京の国子監教授となり、蘇軾が詩を見て絶賛し、蘇と詩の往来が始まる。元豊八年（一〇八五年）四十一歳、秘書省校書郎となる。平原監郡趙挺之と会い、虞世南の「道場碑」を鑑賞し、草書の妙処を久しく学び自得すべきを知る。この時に趙氏に「絳帖」を見せられ、『山谷題跋』に「題絳本法帖」がある。元祐六年（一〇九一年）四十七歳、「蘭亭」の学び方は筆意を師とすべきことを「評書」の中で論じた。このころ学書に述懐して、はじめ周越を師としたが二十年間は俗気を脱することができず、晩年になって、蘇舜元、舜鋭兄弟の書を見て古人の筆意を悟った。その後、また張旭、懐素、高閑の墨蹟を得て筆法の妙を窺うことができた。紹聖元年（一〇九四年）五十歳、草書三昧のうちに、「李太白憶旧遊詩巻」を書いた。元符元年（一〇九八年）五十四歳、戎州にあるとき、舟中、長年訓練した船頭の棹を漕ぐのを見て書の進むのを覚えた。元符三年（一一〇〇年）五十六歳、「黄州寒食詩巻跋」を、建中靖国元年（一一〇一年）五十七歳、「伏波神祠詩巻」を、崇寧元年（一一〇二年）五十八歳、「松風閣詩巻」を書く。崇寧二年（一一〇三年）五十九歳、宜州に於いて張載熙に用筆法を書き与えた。崇寧四年（一一〇五年）六十一歳、九月三十日宜州において卒した。

また、黄山谷が理想とした書の理念は、自然を根底とし俗気を脱していること。微細な技術が優先されるのではなく、人の高貴な心が自然に表出されていること。即ち逸気が備わっていること。外面的なものに気を配るよりは、目に見えない気を重視する見方を平生から身につけていること。そして、絶えず精進と鍛練と学問と悟道をもとに、向上心豊かな精神が感じられることなどである。

以上のような観点から、山谷が魏晋の書に求めたものは技術でも法則でもなく、書の気韻であり、逸気であった。初唐の欧、虞、褚、薛などは法にこだわりがあり、逸気がそれほど見られず、その書風は徐浩、沈伝師になってほとんど亡んだ。しかし、中唐になって、張旭、顔真卿、懐素が出て魏晋以来の超越絶塵の趣を備えた上に、人間性を復活させたことは山谷にとって大きな喜びとなった。即ち二王、真卿と続くホットラインを山谷自身が悟ったことは大きな前進であった。学究と鍛練と悟道の上に立ってすべて体験し、書を深

く愛し、人間性の豊かさ暖かさに支えられることが書に対する彼の信念であった。

本稿は前述の通り、二王と何らかの関係のある十九篇の内、九篇を考察の対象とし、前稿の上巻に続いて下巻とした。

なお、最後になりましたが、本稿をまとめるに当り、次の著者の方々の書籍から多数引用させて頂きました。ここに記して慎しんで感謝の気持を表したいと思います。

『中國書論大系』（第四巻）山谷題跋巻四　足立豊譯　二玄社
『中國書論大系』（第一巻）自論書・論書表　杉村邦彦譯　二玄社
『中國書論大系』（第二巻）書譜　西林昭一譯　二玄社
『宋人題跋』上・下　楊家駱主編・藝術叢編　世界書局印行
『中國書論集』　中田勇次郎著　二玄社
『王羲之全書翰』　森野繁夫・佐藤利行著　白帝社刊
『激素飛青閣平碑記』　楊守敬著・藤原楚水譯　三省堂
『晋書』　中華書局
『晋書』（和刻本正史）　汲古書院
『世説新語』（上・中・下）　目加田誠著　明治書院
『世説新語』（上・下）　竹田晃訳　学習研究社
『随筆三国志』（処士横議）　花田清輝著　筑摩書房
『黄庭堅』　中田勇次郎著　二玄社

注

(1)　「書遺教經後」　和洋女子大学紀要（第33集）所収　拙稿「『東坡題跋』巻四に於ける二王の存在に関する考察（中）」による。

(2) 魯迅の講演　花田清輝「処士横議」からの引用　『随筆三国志』（筑摩書房刊）所収

(3) 精神性からくる自然美　和洋女子大学紀要（第35集）所収　拙稿「『山谷題跋』巻四に於ける二王の存在に関する考察（上）」に既出。

(4) 考究　『東坡題跋』巻四所収　「題遺教經」の中に「僕嘗見歐陽文忠公云、遺教經非逸少筆。」とあるのを山谷自身が研究の対象としたと思われる。

(5) 『自論書』　『中國書論大系』第一巻（二玄社刊）所収　その「解題」（杉村邦彦著）に

この『自論書』は羲之自身の手になったと信じられるほとんど唯一のものであろう。ただ文章は人に与えた尺牘の中から後人が書に関する部分をとり出してつなぎ合せた形迹がある。

とある。

(6) 『論書表』　『中國書論大系』第一巻（二玄社刊）所収　その「解題」（杉村邦彦著）に

虞龢の『論書表』は、唐の張彦遠の『法書要録』の巻二に収録されており、六朝の書論と書跡の蒐集、さらに二王の書に関する逸事を知る上で、最も豊かな史料を提供してくれる。

とある。

(7) 九方皐　春秋時代の秦の人。『中國人名大辞典』に「善相馬。伯樂之所稱。嘗爲秦穆公求馬得之。曰牡而黄。使人往取之。牡而驪。及至。果天下馬也。」とある。また、『列子』には九方皐、『荘子』には九方歅、『淮南子』には九方堙とあるのは実は一人であり、同一人物であると付言している。

（本学助教授）